北斗句会（令和４年３月）選句

大崎石州選

特選

NO,14　　木の芽張る一つひとつの叫びかな

木の芽の緊張が下五の「叫びかな」で表現されており、面白い！

選

NO,4　　山茶花や散り止めどなく今日も暮れ

中七の「散り止めどなく」が良い。

NO,23　　脱皮めく根土の緩む春の草

上五ノ「脱皮めく」が効いている。

NO,28　　落椿なほ地に咲ける構えかな

下五の「構えかな」の表現が面白い。

NO,30　　草萌の土手を走る子寝そべる子

草萌が効いている。情景をうまく詠っている。子は児が良いのでは・。

山縣秀雄選

特選

No.20　病床にお粥の湯気や春霞

中七の表現と季語が季語が合って病気の回復を祈る作者の優しさが滲み出ているのが良い。

選

No.6　蘇る初恋の日の花菜風

初恋と季語花菜風が響き合っているのが良い。

No.15　語るべきことなき背に春の雪

中七に作者の強い意思が表現され、下五が効いているのが良い。

No.28　落椿なほ地に咲ける構へか

中七が落椿の逞しさを表現して良い。

No.33　春炬燵仕舞ふて大の字となりぬ

炬燵がなくなり広々として,ゆっくり休める作者の気持ちが良く表現されているのが良い。

竹内雲泉選

特選

NO.23　脱皮めく根土の緩む春の草

春の草が生き生きとして来て、「この大地が生き物のように皮を一枚脱いだようだ」と言う作者の感性が素晴らしい。

選

NO.12　風光る老舗そば屋の水車小屋

最上川の難所碁点の「あらきそば」屋を思い出しました。蕎麦粉を挽く水車がある。野山のきらきらしてくる春先、此処での蕎麦は実に美味しい。

NO.26　小走りの小さき会釈や寒返る

「小走り」に「小さき会釈」と、ともに再び寒さが戻ったといった感じが良く表れていて素晴らしい。

NO.29　魁をきさふ二輪や梅日和

一輪一輪と咲く梅の花を、「魁をきそふ二輪」と捉えたところが俳人らしい感覚かと思います。

NO.33　春炬燵仕舞ふて大の字となりぬ

やっと冬が去り、炬燵も仕舞って広々とした座敷にゴロリと横になった様が彷彿とします。如何にも春らしい。

宮下ひかる選

特選

NO.14 木の芽張る一つひとつの叫びかな

一様に見えてもよく観て、木の芽一つずつ個性を読み取る作者の心のゆとりと俳人の様が伺え共感を覚える。

選

NO.12 風光る老舗そば屋の水車小屋

快晴に恵まれて、老舗の素晴らしいそば屋に相応しい老麗な水車景色がその雰囲気を醸し出して読み取れる。

NO.16 一気飲みこの味わいぞ春の水

文句なしの一気飲みこの味わいの例えがズバリの春の水に共感する例えが相応しい。

NO.26 小走りの小さき会釈や寒返る

寒さのため、小走りになり、挨拶も会釈になる位の寒さ表現の例えがぴったりの句。

NO.35 風光る砕ける磯の波頭

浩々と砕ける波頭の様を、「風光る」との素晴らしさ表現に共感。

長池豆陽選

特選

№32 握る手の朝の温もり玉珊瑚

目覚めの妻の手を握り体調を確かめる夫、読む人の心も温かくしてくれる夫婦の絆。赤い実の玉珊瑚が効果的。

選

№12 風光る老舗そば屋の水車小屋

水車小屋のあるそば屋、もうそれだけで美味しそう。

№13 トロ箱を蹴散らして行く春嵐

トロ箱を利用することの多い菜園などでは、重石ごと飛ばされ回収に苦労する。春嵐は予想以上に強い。

№19 受験の子確り食べし朝ご飯

緊張しがちな受験。だが作者の子（孫？）は朝食をしっかり食べていった。さすがよと自慢げな貌が見える、諧味十分。

№28 落椿なほ地に咲ける構へかな

盛りの中で突然落ちる椿は、なおも生き生きと新たな生き方を企んでるような不気味さがある。

吉岡誠山選

特選

NO. １春立つや耕す畑の軟らかし

春が来ると畑の土が柔らかくなるといわれているが、本当だと春が来たのを素直に喜んでいるのがよい。

選

NO. 5 東風吹くや樹皮の表面やはらぎぬ

東風が吹き、樹皮の表面が柔らかに成っているのをしり、春が来たんなと感じ入っているのが良い。

NO. 16 一気飲みこの味わいぞ春の水

春のこの１気飲みが忘れられないのだと春が来たのを喜んでいるのが良い。

NO. 25 お大師の手水に移る梅の花

お大師の手水にも梅の花が映っているよ、本当にはるが来たんだなあと春が来たことを喜んでいるのがよい。

NO. 34 妻に客春の香襟に秘そめくる

妻のところに来た客は香を襟にひそめている、何者だろうと探ってしまう。

田中資凡選

特選

NO.33 春炬燵仕舞ふて大の字となりぬ

春炬燵を仕舞った後、大の字となった作者は、何を思っているのか、想像するだけで愉快になる。偕味がある。

選

NO.01 春立つや耕す畑の軟らかし

畑仕事に春の兆しを直に感じ取ったという。中七、下五の措辞は、その感動と喜びを見事に捉えている。

NO.12 風光る老舗そば屋の水車小屋

老舗そば屋と水車小屋の場の設定が見事だ。風光る情景を連想させる。

NO.16 一気飲みこの味わいぞ春の水

飲み水に春の兆しを感じる感性が素晴らしい。一気飲みして胃に流れ込む水、その瞬間に、作者は、これぞ春の水というのだ。

NO.23 脱皮めく根土の緩む春の草

根土が緩んで顔を出し始める草に、脱皮めくという作者の優しさを感じる。

大森康正選

特選

NO.26　小走りの小さき会釈や寒返る

隣近所付き合いでの日常「言われてみれば、その通り」と頷ける。
上五中七のリズム及び季語の取り合わせが良い。

選

NO.06　蘇る初恋の日の花菜風

春の日の初恋の思い出、読者誰にも初恋の体験が蘇る。快い回顧。

NO.20　病床にお粥の湯気や春霞

春が日々深まる季節、病状は、粥が食べられるまでに快復。「湯気」の暖かさが、快復の前兆をも感じさせる。

NO.29　魁をきさふ二輪や梅日和

盆梅の開花を毎朝確認していると頷ける心境。梅の開花は春の花々の魁と言われている。「梅」「魁」の取り合わせ良。

NO.30　草萌の土手を走る子寝そべる子

草萌の季節、寒さから解放された子供達の喜びが、中七下五でリズミカルに、且つリアルに表現された。

森田光彦選

特選

NO.１１　東風吹くや水鳥騒ぐ三番瀬

　渡り鳥に「鳥帰る」（仲春）時期がきたぞと知らせる「東風」。愈々その時が来たかと立ち騒いでいる鳥たちの様子。「騒ぐ三番瀬」に「東風」の季感が上手く詠まれています。リズムもいい。

選

NO.１４　木の芽張る一つひとつの叫びかな

　木の芽の張る様子は、同じように見えるが、仔細に見れば一つひとつ違っている。　それを「一つひとつの（命）の叫び」と捉えた作者の詩情に脱帽。

NO.２５　お大師の手水に映る梅の花

　梅は白梅か。風のない静かな境内、作者の心静かな様子。梅の香がそこはかとなく漂っているようです。

NO.２６　小走りの小さき会釈や寒返る

　寒の戻りに慌てた主婦たちの様子が、見事に詠まれています。措辞の「小」の繰り返しが効いています。

NO.２８　落椿なほ地に咲ける構えかな

　この句から「たましひは枝にのこして落椿　　鷹羽　狩行」を想起。この句は、その「たましい」というか残心を「なほ地に咲ける構え」の措辞で見事に詠まれています。特選句にするか迷いました。

藤田紀潮選

特選

NO.28 落椿なほ地に咲ける構へかな

　大地に落ちた椿の花の様は泰然としてまだ咲いているかのようだ。散りてなお、残身の構えを残している。「なほ～かな」で引き締まった佳句に。

選。

NO.11 東風吹くや水鳥騒ぐ三番瀬

　東風吹く三番瀬は折からの引き潮、多くの水鳥が賑やかに餌を啄ばむ。

NO.13 トロ箱を蹴散らしてゆく春嵐

　春嵐の凄しい力。今時のトロ箱は発泡スチロールだが、句のトロ箱は木製か。

No.25　お大師の手水に映る梅の花

　四国遍路寺には、小さい寺でも境内に弘法大師像が建てられいることもある。その像の傍の手水には梅の花が映っている。南無大師遍照金綱。

NO.35 風光る砕ける磯の波頭

　春らしい浜辺の叙景句。「風光る」がよく効いている。